

真宗教団史に見るその崩壊への系譜

— 宗教理念とはなにか —

吉 岡 亨

日本の仏教は、混迷し激動する時代の波頭に洗われることを余儀なくされてきている。

六〇年代の日本、とりわけその後期において「人間の名」のもとに、既存のすべての根源的存在を問いはじめた学生・青年労働者の蜂起は、日本の仏教の自己形成の過程である教団仏教の歴史をも告発してきた。

過酷な大学闘争のなかで学生たちが象徴的に問いかけてきたもの、すなわち理念として問題提起してきたものは、少くとも仏教のもっている基本的なテーマの一つであろう。

何を第一に解体するのかと問われれば、うまく言えないが（中略）つまりぼく自身ではないかと答えざるを得ない。その先に、今後さらに続く闘争の中でぼく自身の

社会と学問と、何よりも闘争そのものへの新しいかわり方ができるであろう。（『知性の叛乱』——いまこう考える——山本義隆）

永遠性をかけた否定の論理による、「政治」への、「体制」へのそして何よりも「人間そのもの」への自己の実存をかけた問いこそ、じつは、鎌倉の祖師たちが自らの思想と信仰を確立していった仏教の論理ではなかったか。

この学生達の問いに何らなす術も持ちえなかった日本の今日の教団仏教は、いささかオーバーな表現といわれるかも知れないが、みずからの歩んだ歴史こそがその宗教生命を棄て去らせたことを知らねばなるまい。

日本の仏教が、その歴史過程ではじめて宗教的自立を实

現しえたのは鎌倉時代であった。

貴族社会の崩壊から武士社会の形成という「変革期」のなかでは、仏教は歴史の現実との厳しい「緊張関係」に立たねばならなかった。古代からの荘園領主たちの権力「政権」が自壊しはじめると共に、その政権を支えていた「古い」権威と秩序の崩壊と新興政権への移行は社会不安と混乱を招き、人びとを深い苦悩の淵に追い込んでいった。こうした時代のなかで旧仏教もまた、その権威を失い退廃の途に立たされて行ったのも世俗との利害に結ばれている限りまた自然であつたらう。

その旧仏教の退廃と世俗の苦悩をひきうけて、歴史的現実と実存との緊張関係のなかで仏教の理念の新しい展開を實現していったのが、法然、栄西、親鸞、道元、日蓮といつた鎌倉の祖師たちであつた。

鎌倉新仏教が、呪術的信仰から人びとを解放し、儀式主義・戒律主義的宗教を否定して、当時政治的権力と癒着していた宗教を放逐し内面的な信仰の必然（主体性）に従つて、現世的秩序と倫理のワクを打ち破つた「永遠」の信仰の論理を主張したのであつた。

そのことは「貴族」という没落しつつあつた支配者の階級に生まれ、その時代のもっとも権力支配の過酷な収奪に

さらされていた農村社会に身を置くなかで、みずからの思想と信仰を確立していった親鸞のばあいにも明確に実証されている。

かなしきかなや道俗の

良時◎吉日えらばしめ

天神・地祇をあがめつつ

卜占祭祀つとめとす

（親鸞『正像末和讃』）

古代から中世社会まで、根強く世俗の秩序と倫理を支えてきた「神祇崇拜」の思想は、つねに支配者たちの被支配者に対する正当性を保証するものとして「武力」にも勝るものであつた。「氏神」は領主層の祖先神として、農民の側にはなく、つねに支配者の側に立ち底辺にある人びとにとっては畏怖の存在としてあつた。領主層と一体化し、農民をその社会的地位の低さに比例して束縛の度を強力なものにしていつた「神祇崇拜」の守護者は、仏教の教理でもって「王法仏法双翼の如し」と飾り立てたにほかならない旧仏教の僧達であつた。

旧仏教のこうした「現世」への妥協と「権力」への従属に對して、親鸞の「神祇不拜」の主張は、自覚化された歴史的現実への対立的緊張関係を生み、彼による強力な「穢

土「現世批判」の思想となり、同時に「浄土」永遠の救済思想」を大衆のものとして現出させるに至ったのである。

しかし、親鸞によって確立されたラディカルな宗教理念も、その後継者によって「本願寺教団」として社会化され自己権力を形成していく過程で、鎌倉以前の旧仏教が退廃していったように、また、権力への従属と「現世」への妥協を深めていった。

永遠の真実としての宗教の真実は「現世」を貫通し、権力の呪縛との闘争を引きうける「現世批判」を保ち得ないかぎり、その宗教理念も形骸と化し、教条としては存在し得ても、信仰の必然にもとづく主体性は瓦解し去るのである。

蓮如という天才的な宣教師を生んだ真宗は強大な自己権力を形成していくことになったが、本願寺教団の形成の過程は自らの信仰理念の歴史主体を、「王法為本仁義為先」という「世俗の権威に追従する歴史観」を誕生させることによつてのみ可能であったと言つても過言ではない。

親鸞が、権力への非妥協の立ち場に立つことによつて、「現世」の秩序に呪縛された人びとを根源的な解放と救済に導いていった「信心為本」の宗教理念は、その心情を継

承していった農民のエネルギイとなって爆発した「一向一揆」を経て、宗団の指導者によつて抹殺されていった。

「王法をもつて本とし、仁義をもつて先とし、世間通途の義に順じて、当流の安心をば内心にふかくたくわえよ」という蓮如の王法為本への、親鸞の宗教理念である「信心為本」から、まったく相反するイデオロギイの誕生をつなぎうるものは、宗教の「宗団」から「集団」への移行以外の何ものでもない。

信心為本によつて権力の呪縛から解放され、弥陀の救済を農民が確信したとき、蓮如はその宗教理念の存続よりも本願寺教団の存続をあやぶみ、世俗の仁義との妥協、それも「仁義為先」とせよと説いたのである。

この本願寺中心主義という世俗的権威主義と王法為本は「本願寺」確立の手段であつたし、蓮如こそ日本の封建教団の完成者であつた。

蓮如以降本願寺中心主義のイデオロギイは、飛躍的に末寺・門徒を膨張させ、実如を経て証如・顕如の時代に、教団の機構の整備となつて中央集権化が進行していった。その実態は、本願寺と寺院との間に本末関係が急速に進行していったと同時に、末寺の間でも本末関係を持つという二重の支配構造を持つというものであつた。ところが、徳川

時代にはいり、幕府との利害をはりながら東本願寺が分立すると、両本願寺間で末寺の争奪がはじまり、それに伴って、末寺間の本末関係はしだいに崩壊し、より強固な支配関係を持つ本願寺と末寺の関係が、すなわち、本願寺の末寺に対する中央集権的支配機構が、強力に押しすすめられていったのである。

それは宗教理念にもとづく大同団結ではなく、外的利害状況に支配された世俗的集団の政治的イデオロギーにもとづくものであった。こうした自己形成の過程を経た本願寺教団の江戸期の学問政策は封建教団を最終的に完成していった。

江戸期を迎えた仏教教団は、徳川幕府の文教政策により教団的規模の教学機関を設置していった。浄土宗、日蓮宗の檀林もこの国家政策を反映するものであったし、本願寺教団における「学寮」ももなく学林と改称し、それにならぶものとして創設されたのであった。

寛永十六年、本願寺第十三代宗主良如は本願寺境内に学寮を創設、能化職を置き、夏中安居をはじめとして、宗学研修の指導にあたらせた。

中央の教学機関として誕生した学林は、同時に地方でお

こる宗学上の問題、とりわけ異解異安心に対する制裁の役割りをも果たすことになった。

学林の能化などの学匠によって糾明された事項を『竜谷大学三百年史』は次のように列挙している。

- (一) 寛文四年知空、明覚寺存空の異義を糺す。
- (二) 延宝元年知空、紀州河那部の邪徒を鷲森に召集し、弁破してこれを正した。
- (三) 延宝四年七月信越の間に策励の異計あり、原東門より出ず、知空は堂衆道空とともに宗主の教諭消息を持ち、趣いて衆にこれを示して惑を解いた。
- (四) 宝曆三年八月僧樸、若狭鳥羽谷宝重寺春東の信を執し行を廃する等の異義を弁破す。
- (五) 宝曆五年十二月憲栄・僧樸の二人、本山の諸僧とともに土蔵秘事を糺弾す。
- (六) 宝曆六年七月義教、天満妙安寺慈吟の信に執し行を廃するの邪義を検す、これより先、憲栄また『紫朱弁』を著してその謬を弁明した。
- (七) 宝曆七年十月土蔵秘事の党類既に官裁を蒙りたるを以って、僧樸諸寺を巡曆し回邪帰正せしむ。
- (八) 宝曆十年十二月道粹・僧樸・憲栄・長門円空の一如秘事を検ぎやくす。

(7) 宝曆十三年七月憲米・道粹・継成、豊前桑州の邪義

を糺明す。

また、地方から中央に持ちこまれた教学論争には、承応年間起こった「承応闕牆」、明和年間の「明和法論」、宝暦年間に「三業惑乱」とそれぞれ名付けられるものがある。(詳細は『竜谷大学三百年史』を参照されたい)

これらの論争はその度毎に幕府の介入するところまで發展し、「公儀」の手によって学林の取り壊しや関係者の追放、入牢が行なわれるという宗教理念によらない政治的次元での結着がつけられている。

幾多の教学論争を経て「三業惑乱」以後、本願寺の異解異安心に対する取り締まりについて、「目付」「隠密」を置いて監視をさせるほか、文化四年四月、十三カ条の制条を設けるなどの対策を構じている。そのうち「宗意安心」についての取り締りについて四カ条があるが、当時の状況を推測するのに適当と思われるので原文を紹介しよう。

一御当流御安心の儀者、御代々善知識御相承被_レ為_レ在_レ之、親敷御教化被_レ成_下候趣を以、自行化他致し可_レ申_上、近來心得違候ものも在_レ之、未学之書抄に拘、安心之正非を論じ候趣相聞、言語道断不届に被_レ思召_上候、自今以後、聖教之所判に無_レ之義趣者、不_レ及_レ申新名目を相立候事、

堅停止被_レ仰附_上候事

一御宗意御相承通、蒙_レ御直裁断_上候哉否之儀、所化記帳之上相糺、其段御殿江申上、正否御糺可_レ奉_上願事

一去寅七月從_レ公儀_上被_レ仰渡_上候通、末学著述之書類、御本山御許容無_レ之開板者勿論、弟子等江附与_上いたし候儀も御停止に候、万一心得違のもの於_レ有_レ之者可_レ為_レ曲事、一学林におゐて学頭を重し候余り、善知識を奉_レ敬候に似寄候取扱、近頃相聞相応不相応不_レ相弁_上次第、不_レ冥加之至に候、向後心得違無_レ之様可_レ致候、乍_レ然学頭を輕し候事致聞敷、相当之禮節可_レ有_レ之事(『竜谷大学三百年史』)

これらはそれぞれ「異義妄説」の禁止、所化(学生)「安心」の取り締まり、著述出版の統制、学頭崇敬の限度を規程したものである。(一番目と四番目の規程は「三業惑乱」時に学林側がその裁断で敗北したことに起因するものである。)

ついで、文化四年には重ねて所化の安心調査が命じられさらに同十三年には書籍開板について出版の書店までも指定し、統制はますます堅固になっていった。

中央の教学機関の設置は、このような経緯を経て宗学の

政治的従属へと追いやっていったのである。

常に権力支配を背景にしなが、教団がよって立つべき宗教学の正統性を主張していった結果は、その宗教理念を「教条」として堅固なものにしていくことに成功はしても信仰の内在的論理を維持し展開していく「現世」への歴史主体をスポイルしていくことにしかならなかった。

日本の旧仏教が政治への従属をはじめたときごとく退廃への途を辿ることを余儀なくされたように、本願寺教団もまたこの呪縛からのがれることなく、みずからその深淵に身を沈めていったのである。そして、すべからず日本の仏教は、現代に到ってもなお、政治従属のパターンを「仏教」のパーソナリティとしており、そこから脱却することを知らないかのようなのである。

それは、政治権力の呪縛のもとで利害を一致することによってその共同体を存続させてきた歴史が、みずからの宗教理念を浸蝕しつつしているからであるといったら過言だろうか。

われわれはいま、混沌と激動の大きな歴史の転換点に立たされている。そして限りなく深まっていく歴史の苦悩の行く手に、懸命になってわれわれの進みゆく道を見定めようとしている。今日の状況は、鎌倉の祖師たちが「末法」

と観じた時代状況と質的に大きな開きはしない。七〇年代の激しい歴史への幕明けは、日本の宗教の行く手をまた問い正さずにはおかないだろうし、その歴史への解答をせまられていることを銘記しなければならぬ。日本の仏教が、「宗教」としての自立と回帰をせまられている今日、われわれは、もう一度その歴史の真実を見つめなおそうとする姿勢を失ってはならない。

(あとがき)

伝統仏教諸教団の調査を継続してきた調査部では、ただ現状の客観的判断資料をレポートするということにはあまり関心をはらってきていない。生きた教団の歴史のうえに必然された現状を見きわめ、未来を予見し、主体的な実践課題をそこから導きださねば、現宗研の研究・調査活動の本旨からはずれるものと考えている。

今回は真宗本願寺派で活躍している青年教師吉岡亨師に依頼して、本派教団の主体的課題をふまえたレポートを執筆していただいた。真宗本願寺派における教学問題の軸に「勸学寮」の存在があり、それをめぐる抗争は中世以来の諸事件をひきおこしてきた。

大谷派が清沢満之、曾我量深、金子大栄、暁鳥敏、高光大船、安田理深など多彩な近代教学思想の担手を輩出したのにひきくらべ、教団制度的な面でいち早く近代への適応をはかり、(衆会)

現在の宗議会制度の設置など）島地黙雷らは信教自由権を主張して日本仏教近代史に先駆的な役割をはたしているながら、現在なお教学の近代化においてたちおくれを示していることは、この勸学寮の存在と無関係ではないであろう。教権の確立が、教団の世俗的権力とゆ着したとき、教学の発展がはばまれ、教団全体の発展に大きなブレーキとなったひとつの実例をここにみることができよう。多忙ななかによりながら心良く執筆をおひきうけいだいた吉岡亨師に深く感謝の意を表します。

（調査部・丸山）